



Title	懐徳堂研究の新展開
Author(s)	大阪大学中国哲学研究室
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2012, 46, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/27217">https://hdl.handle.net/11094/27217</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔研究史展望〕

## 懷徳堂研究の新展開

大阪大学中国哲学研究室

キーワード：懷徳堂、儒礼、漢学、洋学、絵画

はじめに

懷徳堂が学術研究の対象として明確に意識されたのは、西村天囚『懷徳堂考』に始まると言えよう。明治四十三年（一九一〇）の朝日新聞連載論考をまとめたこの書は、上巻三十五部、下巻七十五部が同志に配布されたのみであったが、大正時代に懷徳堂記念会によって重印され、また、昭和五十九年（一九八四）、懷徳堂友の会によって初印本の復刻がなされた。内容は、三宅石庵・五井蘭洲から並河寒泉に至る懷徳堂百四十余年の歴史を通覧したものであり、今日においても、懷徳堂研究の最も基本的な文献としての価値を持つ。

その後、懷徳堂に関する本格的な研究が始まるのは、昭和五十年代以降である。加地伸行ほか『中井竹山・中井履軒』（明徳出版社、一九八〇）、陶徳民『懷徳堂朱子学の研究』（大阪大学出版会、一九九四）などはその代表的な成果。いずれも、懷徳堂の儒学・朱子学としての性格に注目して研究を深めたものである。さらに、平成に入ってから、懷徳堂文庫資料のデジタルアーカイブ化が推進されるとともに、懷徳堂の諸情報を包括した『懷徳堂事

典』（湯浅邦弘編著、大阪大学出版会、二〇〇一）が登場した。

そして近年、懷徳堂研究には、注目すべき新たな動きが見られる。大阪大学出版会が「阪大リーブル懷徳堂シリーズ」全五冊を企画し、その四冊目として中央大学教授岸田知子氏の『漢学と洋学』、五冊目として大阪大学教授奥平俊六氏編著の『懷徳堂ゆかりの絵画』が刊行されたのである。また、台湾・淡江大学の田世民氏が博士論文を中心にまとめた大著『近世日本における儒礼受容の研究』にも、懷徳堂について多くの言及がある。いずれも、これまでの懷徳堂研究にはなかった視点から懷徳堂を取り上げていると言えよう。

そこで、本研究室では、これらの新たな動向に対応するため、平成二十四年度中国哲学演習（漢籍資料学演習）の一環として書評の作成を企画した。毎回、担当者を決めて、受講生全員で検討を加えた。本稿はその成果の一部である。それぞれの書評については、末尾に文責を記すが、全体の責任は湯浅が負う。

（湯浅邦弘）

### 一、『近世日本における儒礼受容の研究』（田世民著、ぺりかん社、二〇一二年）

現代の日本人にとって儒教を宗教として意識することは、ほとんどないと言ってよいのではなからうか。しかし、宗教としての儒教は、意外に私たちの近くに存在する。例えば、位牌の存在がそれである。日本において位牌は、仏教のものと思われているが、実はインド伝来のものではなく、中国の儒教の「神主」に由来するものである。

また、最近では必ずしも厳格に守られているとは言えないが、服喪の規定も儒教に由来する。つまり日本仏教は、多分に中国化されており、儒教の習俗・儀礼を取り込むことで成り立っているのである。仏教界においてさ

え、儒教の影響が顕著であるのだから、私たち日本人の祖先は、儒教の大きな影響下にあったと想像される。

日本において、特に儒教の影響が大きかったのは近世である。近世日本においては、新儒教とも呼ばれる朱子学が、徳川幕府の幕藩体制を支える国家教学とも言うべき位置にあった。しかも、儒教は単に学問として受容されただけではなく、儒教の宗教的実践ともいうべき儒教儀礼、すなわち儒礼の受容もなされていたのである。

本書は、題名の通り近世日本における儒礼受容の諸相をまとめたものである。従来、近世日本の儒教研究としては、学問としての儒学研究が中心で、儒礼実践については十分研究されて来なかった。本書において著者は、儒礼受容の実際という独自の切り口によって、従来には見られない近世思想史の研究成果を展開しているのである。

まず「序論 近世日本の儒礼実践・東アジアの視点から」において、「新しい近世思想史研究への視座」が述べられている。「本書は、近世日本の儒家知識人が朱子『家礼』をいかに受け止め、それを社会生活においていかに実践し、自らの思想をいかに展開していったか、この点を思想的に明らかにするものである」（十一頁）。

ちなみに朱子『家礼』とは、一般士人の家庭内における礼作法を記したもので、冠婚葬祭という最も重要で基礎的な礼を説く文献である。この書は、広く東アジア世界に伝播して、多大な影響を与えた。

従来、近世日本における『家礼』受容をめぐる研究は、概ね低調であった。その理由としては、江戸時代は幕府の政策により寺請制度が確立し仏式葬儀が制度化されていたので、儒教儀礼はほとんど定着しなかったと従来考えられてきたことが挙げられる。しかし著者は、次のように指摘する。「近世日本儒学を考える場合、儒家知識人が積極的に儒教儀礼を実行しようとした事実を見逃してはならない」（十九頁）、「日本儒学に宗教性が乏しかったという従来の指摘にも、一定の修正が迫られねばならない」（二十頁）。

次に著者は、本書の行論のスタンスとして以下の六つの留意点を述べる。第一に、近世日本の知識人の『家礼』に対する様々な受け止め方を解明する。第二に、知識人たちの社会生活の具体的な実態に注目する。これは、テキスト分析に偏った研究を、暗に批判するものである。第三に、儒礼の受容と実践をめぐる一次史料を発掘分析すると同時に、知識人たち相互の比較を行う。第四に、近世日本の儒家知識人の思想実践を「日本的儒学」の視点では捉えずに、東アジアにおける儒学の一つの動態的な展開例と見る。第五に、『家礼』をめぐる東アジアにおける比較思想史・社会史へと発展することを志向する。第六に、葬祭儀礼をめぐる人々の死生観や生命観に注目する。

以上六つの留意点に沿いながら、本書の各章が論述されている。

第一章では、熊沢蕃山が取り上げられ、その儒礼葬祭論が論究され、著作とされる『葬祭辨論』について考究されている。蕃山は、江戸時代初期の儒学者であり、岡山藩で藩政に関わった執政官でもある。「日本陽明学の祖」中江藤樹の弟子でもあり、その思想は学者の注目を集めているが、本書の著者が指摘するように「基礎となるテキストの校訂や著者の問題については、いまだ十分に検討されていない」状態である。その意味で、本書第一章で蕃山が扱われているのは、今後の研究にとって指標となるものである。

第二章では、山崎闇斎学派（崎門派と称される）が取り上げられ、第三章では、崎門派の傑物浅見綱斎が取り上げられている。崎門派ならびに浅見綱斎の日本儒学史、近世日本思想史における足跡は大きく、二つの章にわたり論考されているのは、きわめて妥当なことと考えられる。

第四章では、水戸藩の儒礼実践について論述されている。水戸藩は、第二代藩主徳川光圀以来、学問を貴ぶ独自の藩風を持っており、後世に与えた影響も大きい。

第五章、第六章で取り上げられているのが、懷徳堂の儒礼である。懷徳堂は、近世大坂を代表する学問所であり、わが大阪大学文学部の前身に位置づけられている。その懷徳堂について多くの紙幅が割かれ詳細に論述されていることは、今後の懷徳堂研究についても、大きな意義があると考えられる。

ここにその論述の一端を紹介すると、懷徳堂の特色は、「朱子学を基本としながら特定の学を絶対化せず、諸学の利点を摂取し終始柔軟な姿勢を保ち続けていた」ところにある。儒礼に関して見れば、一般に儒礼葬祭は仏式葬祭に対して「排仏」の立場をとるものであるが、著者の指摘によれば、「懷徳堂の家礼実践は単に排仏ではなく、世俗との調和を何よりも心がけていた」（一九三頁）ということである。

具体的には、中井甕庵が主張するように、菩提寺との間に円滑な関係を保たねばならないということであった。よりよい葬儀を行うためには、むしろ世間の喪祭習慣とうまく折り合いをつけながら実施していかなくてはならない。そのようなきわめて現実的な問題の処理の方法を、懷徳堂の知識人たちは持っていたのである。

なお、懷徳堂について本書では、更に二つの補論「江戸日本における儒礼実践の中の『論語』」「中井竹山・履軒の礼学についての一考察」でも論及されており、著者の懷徳堂に対する関心の深さ、評価の高さが窺われる。

最後に結論の章において、儒礼実践に生きる知識人の諸相が論述されている。この中で注目されるのは、神道の「神葬祭」についての言及である。現在において「神葬祭」は、既に体系だった葬祭儀礼を有するが、著者の指摘する通り、「古来固有のものではなく、近世において『家礼』の影響を受けつつ、独自の儀礼を発展していったもの」（二四六頁）であり、「本来まとまった儀礼体系に乏しかった神葬祭であるが、その派生過程において『家礼』から大いに養分を摂取し、その中身を豊かにしていったことは、紛れもない事実であろう」（二四八頁）。

現代の日本において、葬儀の八割は伝統的な仏式葬儀であると伝聞している。仏式葬儀において、その司式者である日本仏教の僧侶に求められるのは、漢訳仏典の音読による呪術性であるが、併せて服喪の規定や位牌の取り扱いはなどの知識の習得が求められよう。しかし、インド仏教には服喪の規定や位牌の存在はなく、現代の日本仏教の僧侶にとっては、その取り扱いに苦慮してはいないだろうか。

また近年、伝統的仏式葬儀に捉われない新しい個性のある葬儀が模索されつつある。しかし、日本を含む東アジアの葬祭儀礼の根底には、実は儒教の『家礼』が存在することを知る人は少ない。『家礼』については、近世日本において受容され、多方面にわたって影響を与えているのであるが、なかなかその事実には衆目が集まらないのが現状である。

そのような中であって、本書により近世日本における儒礼受容の諸相を知ることができることは、きわめて有益であると考えられる。本書は優れた研究論文集であるが、同時に日本における『家礼』受容についての啓蒙書であるとも言える。

(野口真戒)

二、『漢学と洋学』（岸田知子著、大阪大学出版社、二〇一〇年）

本書は、漢学教育が広く行われていた江戸時代に、洋学がどのように受容されたのか、また漢学からどのような影響を受けたのか、について考究した書である。まず「はじめに」で基礎情報を解説し、その後、「洋学受容と漢学」、「洋学者たちと漢学」、「洋学がたなく大坂知的ネットワーク」、「伝統と新知識のはざままで」の四つの章を設

ける。また本書の所々には、読者への配慮としてコラムが附記されている。

「はじめに」は、まず本文を読む前の導入として、「漢学とはなにか」「洋学とはなにか」など、基礎的な知識について平易に解説する。そして、漢学者を「物知り」とした上で、「世の「物知り」たちの漢学知識が洋学受容の妨げとなったことは間違いない。一方で、高レベルの知性が培われていたため、西洋の知識も比較的容易に受け入れられたという面もあっただろう。その上で、西洋の学問世界と漢学世界とのせめぎ合いも起こったのではないだろうか」(十一頁)としている。ここでは、本書における重要な問題設定が提示されている。

第一章では、日本に移入された洋学が、元々古くから伝わっていた漢学の影響をどのように受けたのかについて記述する。まず第一節では、蘭学者第一号とされる青木昆陽の蘭学研究について取り上げる。昆陽の蘭学研究が「実学研究の延長上といつてよく、そこには漢学の伝統にいどむようなものはみられない」(二十九頁)ことや「漢学者の博物学的好奇心の枠を出ない」(三十三頁)ことを述べる。次に第二節では、朱子学の「格物窮理(万物を深く追求して客観的に理を求めぬ)」が洋学者たちに影響を与えていることを指摘する。そして第三節では、蘭学者である杉田玄白が、漢学者である荻生徂徠の影響を受けていることを述べる。

第二章は、洋学者が漢学に対して持つジレンマについて述べる。第一節では、洋学者(蘭学者)が文章を書く際に、本編はカナ交じり文だが、序文は漢文というスタイルがほとんどであったことが記される。そして漢文には、オランダ語翻訳に役立ったという功績と、それを利点として漢文を学び続けたことから、洋学者がいつまでも漢文世界から脱却できなかったという罪の両面があることを指摘する。また、「ふつうのオランダ語訳述スタイルは、こののちも漢文訓読法に近かったといえよう。したがって、オランダ語を学ぶ前に漢文を学べという風潮は残って

いく」(五五頁) ことも述べている。第二節では、反蘭学者の提言・批判を受けた蘭学者がどのように反論を行ったかについて、杉田玄白の『狂医之言』および大槻玄沢の『蘭学階梯』とその序文・跋文を例に挙げて詳説している。ここでは、蘭学者の反論に中国古典が所々に引用されており、「蘭学研究者およびその礼賛者が、漢学の伝統をあたかも足かせのように引きずって発言している」(一一二頁) ことがわかる。

第三章は、大阪の二つの学塾と洋学関係者について記述する。まず第一節で、懷徳堂と適塾という大阪の二つの学塾を取り上げ、その交流関係について言及する。ここでは、漢学を教える懷徳堂と洋学を教える適塾が、共に江戸後期から幕末にかけて、それぞれ一つの学塾にとどまらず、全国的な知的ネットワークの中心であったことが窺える。第二節では、蘭学以前の日本の医学の歴史について、時代を追って述べる。ここからは、日本医学が一時期を除いて、中国医学の影響を受けていたことがわかる。第三節では、漢学と洋学をつなぐ働きをした人物として、中井履軒と山片蟠桃を取り上げている。中井履軒は、元々朱子学を学び、その実証的な観点から研究を進める方法論を用いて経学研究を行っていたので、「観察と実験を重んずる洋学と接触は、履軒に自らの学問への確信を持たせることになった」(一二九頁) と筆者は推測する。そして、履軒が麻田剛立から、洋学である天文学や医学の知識を学び、『越俎弄筆』、太陽暦による『華胥国曆』、「顕微鏡記」を著し、各種の天体図を作成していることを記している。また、仁斎の学問を受け継いだ山片蟠桃は、『夢ノ代』を著し、そこからは、西洋天文学(洋学)を朱子学的方法論の中にはめこもうとしていたことや、西洋医学を肯定的に評価していたことがわかる。

第四章の第一節では、五行説を取り上げ、洋学者の前野良沢と漢学者の山片蟠桃が、共に五行説を否定していることを記述する。次に第二節では、広瀬旭莊を取り上げる。ここでは、旭莊が自身の日記の中で、蘭学の優位性を

信じてはいるが、儒学者としての立場を離れることなく、自己弁護に努めているということを指摘する。

このように本書では、江戸時代の様々な学者を取り上げ、それぞれの立場から洋学と漢学との関係を明らかにしている。洋学が漢学の影響を大きく受けていることはもちろん、漢学も洋学の影響を受けていることがわかる。その中でも特に興味深いのは、洋学者が漢学を「足かせ」と感じていただけではなく、漢学者が洋学を受け入れる際にも、漢学が「足かせ」となってしまいうケースがあったことである。また中井履軒のように、朱子学の実証合理主義が洋学受容において、架け橋的な役割を果たしたことも見逃すことのできない点であろう。これらのことから、江戸時代において伝統的な漢学が持つ影響力を、改めて認識することができる。これまで、洋学史や洋学者について解説している書物はたくさんあるが、洋学と漢学の関係という観点から、洋学を扱っている書物は少なく、この点において本書は高い意義を持つと言える。

ただ、本書を通読して、更に追究してみたい点もいくつか浮かび上がってくる。まず第一に、江戸における広い意味での「洋学」という点である。本書は「江戸時代に移入された西洋学術という意味で「洋学」を用いる」（一三頁）としているが、実際に取り上げているのは、主に西洋の医学・天文学、及びそれらに携わった人々である。しかし、江戸時代に西洋の影響を受けたのはこの二つの分野だけではない。

例えば兵学は、江戸時代になって大きく発展した分野であるが、兵学を扱う主な学者は、やはり朱子学者（漢学者）であった。先に述べた通り、江戸時代には漢学教育が幼少の頃より行われており、純粹に兵学のみを扱う学者はほぼいなかった。『兵学と朱子学・蘭学・国学』（前田勉、平凡社選書、二〇〇六年）によれば、「近世日本の兵学は、基本的には戦国末期の軍隊組織の統制法をベースにしてきたが、その理論化にあたっては、中国の朱子学や

兵学の言説を利用していた」という。例えば、実際に『孫子』の注釈書は江戸以降、日本の学者によって多く記された（林羅山『孫子諺解』や荻生徂徠『孫子国字解』など五十以上）が、その大部分は朱子学者（漢学者）としての立場から『孫子』を解釈したものであった。

『戦略思想家事典』（前原透監修、芙蓉書房、二〇〇三年）や、『日本兵法史下』（石岡久夫、雄山閣、一九七二年）によれば、兵学の分野において西洋の戦術・技術・思想が多く伝わるのは、江戸後期から幕末にかけてである。江戸後期に入ると、西洋から近代的な兵学が伝来するようになった。例えば、ナポレオン戦争での三兵戦術についての参考文献は、この時期に蘭学者の高野長英や鈴木春山によって翻訳されている。また、一八四二年に中国がアヘン戦争に敗れると、幕府は旧来の兵学流派の反対にもかかわらず、洋式砲術を西洋から取り入れ、翌一八四三年にペリーが来航すると、幕府はオランダから西洋式大型蒸気船を購入した。明治に入ると、今までの日本兵学の実用性が疑われはじめ、実用的な西洋の兵学がいつそう受容され、日本兵学に取って代わって用いられるようになった。このように近世の日本兵学は、世界情勢に応じて大きく変化していった。西洋兵学の受容は、西洋医学や西洋天文学よりも少し時代が遅れるが、近代日本に多大な影響を及ぼしたのである。また、江戸時代の兵学以外の分野である、宗教学や本草学がどのように西洋学問の影響を受けて変容していったのかも、注目される点である。

第二に、明治以降における西洋学術の受容がどのような点であったのか、という点である。本書では、主に江戸時代の西洋学術の受容について述べているが、その後については、「あとがき」で少し触れられているのみである。近世日本における洋学の受容は、もちろん重要であるが、やはり明治維新を経て大きく変容していく日本において、どのように洋学が影響を及ぼしたのかは、大変興味のあるテーマである。

そして第三は、日本だけでなく、近隣諸国が西洋美術をどのように受けてきたのか、という点である。視野を近隣諸国（特に中国）にまで広げることによって、日本における洋学受容の特徴がよりいっそう明確になるのではないだろうか。

ともあれ本書は、漢学・洋学の研究の推進において、きわめて有意義な成果である。

（椛島雅弘）

### 三、『懷徳堂ゆかりの絵画』（奥平俊六編著、大阪大学出版会、二〇一二年）

本書は、美術史研究者四氏による共著である。全体は二部構成となっており、第一部「懷徳堂の人々と絵画」で、懷徳堂文庫の作品を中心に、懷徳堂を担った人々の絵画や画賛を紹介する。第二部「懷徳堂をめぐる絵画」では、懷徳堂に関わりのある画家や、その作品について取り上げる。第一部は奥平俊六氏の執筆、第二部は秋田達也、安永拓世、橋爪節也の三氏が各一章ずつ担当している。

まず「はじめに」では、懷徳堂の大まかな歴史と本書の概要が述べられている。「江戸時代の人々にとって、絵画というメディアは今日私たちが想像する以上に親しいものであった。学問所もまた例外ではない。絵画との関わりを通して、大坂の学問所懷徳堂の人々の姿、彼らが生きていた時代の雰囲気により具体的に浮かび上がるようであれば望外の喜びである」（ii頁）とあり、絵画という分野から、懷徳堂やその人々に迫るといふ方針が示されている。

第一部の各章は、まず初めに取り上げる人物の説明を行い、その人物の画や賛を、各作品ごとに紹介する。作品

については、画材や法量などの作品情報を記した後に、主題や書き手の意図などについて考察が加えられる。

一章は、初期懷徳堂の学主に焦点を当て、二代学主中井髷庵と三代学主三宅春楼の関わった作品を紹介する。いずれも素人の絵であることわった上で「水準が高く、江戸時代の学問所の人々がどのように絵画に関わったのかを考察する上でたいへん意義深い作品である」と評している。

二章は、懷徳堂の書院講堂に実際に飾られていた襖絵と扁額について紹介する。これらは寛政四年（一七九二）江戸の大火によって懷徳堂が焼失した後、再建した懷徳堂に掲げられたもの。襖絵「帰馬放牛図」は、『書経』武成篇の「帰馬于華山之陽、放牛于桃林之野」（馬を華山の陽に帰し、牛を桃林の野に放つ）に典拠を持つ作品であり、平和を象徴する「帰馬放牛」が主題であると指摘される。

三章は、四代学主中井竹山の画賛と「懷徳堂の画家」である薮関月と中井藍江について紹介する。竹山の時代、彼らは懷徳堂の敷地内、もしくは門前に住んでおり、懷徳堂の活動に深く関与していた。藍江筆「中井竹山像」は寛政十年（一七九八）正月初講の折、宴会の席で行われた書画の競作で描かれたものであり、竹山がその場で賛を付したものの。即興で描かれた画で、斜め後ろからの描写であるにも関わらず、「かえって像主の雰囲気をよく伝え」「画家の非凡さを示している」と評されており、藍江と懷徳堂との親密な関係が窺えるようである。

四章は、竹山の弟である中井履軒に焦点を当て、履軒の肖像画、履軒筆の『左九羅帖』、上田秋成と合賛した「鶉図」を紹介する。履軒は賛をほとんど遺していないが、絵画作品が遺されており、前章の竹山が好んで着賛し、絵画が遺されていないのとは対照的である。絵や賛といった面でも、兄弟それぞれの個性が表れており、興味深い。

五章は、画家の岩崎象外について紹介する。象外は専業の画家ではなく、詳しい伝記はわかっていないが「その技量は高く、奇想の思索家履軒の特異なイメージを実体化できる数少ない友であったと考えられる」（七十一頁）として、象外筆、履軒賛の二作品を取り上げている。その一つである「象背宴集図」には贋作だという説もあるが、著者は東山月峯上人が池大雅の遺作鑑識について述べた言葉を引用して反論している。「偽を以て真と為す」ことがあっても「真を以て偽と為す」ことがないよう心がけたいとする。

六章は、江戸時代の懷徳堂末期頃の学者である中井蕉園、中井柚園、並河寒泉を取り上げて、彼らが賛した作品を紹介する。特に「騎馬武者図」が大きく取り上げられており、画と賛の関係から「蕉園自身がプロデュースした作品である可能性が高い」（九十四頁）としている。また、賛の内容と、なかなか官学化に至らない懷徳堂の状況を結びつけて、「幕府の対応に対する蕉園の言いしれぬ思いがこめられているのではないだろうか」（九十五頁）と指摘している。

七章は、中井木菟麻呂（号天生）と履軒の模写作品が紹介される。天生は「双鉤」という書き写しの技法を用いて、懷徳堂に関する絵画や賛の模写を残している。「双鉤」とは、文字の輪郭を敷き写しにすることであり、その輪郭内を墨で埋めることは「双鉤填墨」と言う。もともとは書の学習法であり、絵画の模写に用いられることは珍しいと述べられており、非常に興味深い。また、履軒が行った技法で、双鉤でかたどった外側を黒く塗りつぶして拓本のようにする「逡巡碑」についても注目されている。

次に、第二部の内、秋田達也氏による一章は、部関月を取り上げる。関月と懷徳堂とのつながりを紹介した後、関月筆「廬山図」に関して、主題が「なぜ廬山でなければならなかったのだろうか」（一四六頁）という問題

設定をしている。この問いに対して、作品に描かれている白鹿洞書院の懷徳堂における位置づけを手がかりに、論を進める。まず、白鹿洞書院が朱子によって再建されたことを踏まえ、「白鹿洞書院揭示」や「朱文公大書拓本」、「宋六君子図」など白鹿洞書院や朱子学に関係する作品が懷徳堂に掲げられていたことに触れている。以上より、朱子学と懷徳堂との関係を明らかにした上で、「白鹿洞書院が建つ廬山は、懷徳堂の人々にとつて、単なる風光明媚な異国の名所ではなく、聖地というべき場所だったのである」とし、白鹿洞書院と共に「廬山」を描く意味を、「懷徳堂にふさわしい画題として選ばれたと考えるのが自然だと思われる」（一五五頁）と結論づけている。

安永拓世氏による二章は、荒木李谿について取り上げる。その実績や懷徳堂との関わり、「本邦画譜」「画帖」「山雪狩埜氏十雪摹帖」の三作品を紹介する。李谿は江戸時代中期から後期にかけて漢詩人、もしくは文人として大坂でよく知られた人物で、大坂で最も有名な漢詩結社であった混沌社との関わりが注目されている。以上、李谿の交友関係を紹介した上で、その交友関係の大きな画期が、安永四年（一七七五）四月の李谿主催の詩会前後にあったことを示し、「懷徳堂関係者と混沌社とを結ぶパイプ役を、李谿が担った」と指摘している。次に三つの作品の紹介を通して、新たに交流があったことが確認できる人物がいること、李谿が日本や中国の絵画の歴史や典拠にかなりの知識や興味を持っていたことを明らかにしている。

橋爪節也氏による三章は、木村兼葭堂を取り上げ、懷徳堂との関わり、その作品について考察を加える。「兼葭堂日記」に中井竹山が「中井善太」の名で何度も登場しているため、その記述をたどることで、懷徳堂との関係を明らかにしている。また、兼葭堂と谷文晁との関わりにも注目し、「兼葭堂日記」に見られる文晁の動向から、「帰馬放牛図」を描いたのは、寛政八年の大坂滞在中「兼葭堂日記」に登場しない期間、三井元孺の雅会の八月六

日以降、奈良、紀州への出立を伝えるに兼葭堂を訪れた八月二十二日までに絞り込めるかもしれない」(三二二頁)と推測している。

総じて本書は、絵画の初心者にも分かりやすく記述されている。作品の解説を読み進めると、絵画と江戸の人々との関わりが明らかとなり、また、掲載された多くの画像を見るだけでも大いに興味が持たれる。

懷徳堂文庫には、文献だけでなく、数多くの絵画や書幅などが含まれている。これまで、特に絵画や書に絞って紹介するものはなかった。随所に見られる、美術史家ならではの意見は非常に興味深く、懷徳堂研究において、絵画や書といった新たな視点が設けられたことは意義深い。また、懷徳堂の美術作品が紹介されたことは、近世日本美術史においても意義のあることであると考えられる。

「おわりに」でも触れられているが、懷徳堂文庫の重要資料が今日まで遺っているのは、木菟麻呂とその妹終子の努力のたまものである。近年は大阪大学においても、関係資料の修復が行われているが、資料の保存について、まだ配慮が足りない指摘されている。本書で紹介されている懷徳堂文庫蔵の作品は、その中の代表的なものではあるが、一部にすぎず、全てが網羅されているわけではない。今回紹介されなかった作品についても、将来解説が加えられることが期待される。

(大山千尋)

(湯浅邦弘…文学研究科教授、野口眞戒…柊島雅弘…大学院博士前期課程学生、大山千尋…文学部学生)

## 摘要

## [研究史展望] 懷德堂研究的新發展

大阪大學中國哲學研究室

近年來，懷德堂研究出現了一些令人矚目的新動向。首先作為大阪大學出版會策劃的「阪大リーブル懷德堂シリーズ」全五冊中的第四、第五冊，刊行了中央大學教授岸田知子著作的《漢学と洋学》與大阪大學教授奧平俊六編著的《懷德堂ゆかりの絵画》。另外，台灣淡江大學的田世民在綜合其博士論文的大著《近世日本における儒礼受容の研究》中，也多次言及懷德堂。可以說以上幾部著作，均從異於以往懷德堂研究的視角對懷德堂進行了論述。

為了應對這些新的動向，並作為 2012 年度中國哲學演習（漢籍資料學演習）的一環，本研究室計劃陸續推出書評，每次由具體人員負責並由全體參與演習人員進行共同討論。本稿就是其成果的一部分。

- (1) 《近世日本における儒礼受容の研究》（田世民著，ベリかん社，2012 年）

本書為總結近世日本儒禮受容情況的著作。特別是第五章、第六章、補論中提及懷德堂，認為其特色在於「以朱子學為基礎而並未絕對化特定學問，攝取諸學問長處而始終保持一種靈活的姿態」，以及「懷德堂的家禮實踐不單是排佛，而是最重視與世俗的調和」。

- (2) 《漢学と洋学》（岸田知子著，大阪大學出版會，2010 年）

本書，是研究在廣泛推行漢學教育的江戶時代，洋學是如何被接受，又受到了漢學怎樣的影響等問題的著作。關於懷德堂方面，作為聯結漢學與洋學的人物，書中特別提及到中井履軒。

- (3) 《懷德堂ゆかりの絵画》（奧平俊六編著，大阪大學出版會，2012 年）

本書由美術史學者四人共著。書中指出「對江戶時代的人們來說，繪畫這種媒體比我們今天想像的要更接近於生活」，本書從以往懷德堂研究中未曾提及的「繪畫」領域出發，來分析懷德堂及其人物。在近代日本美術史研究方面也可說是一部意義深遠的著作。